

第63話 (41頁) 小鳥

セリョージャは名の日*のいわいに、いろいろなプレゼントをたくさんもらいました。こまも、木馬も、絵もありました。けれども、なかでいちばん高いプレゼントは、おじさんがセリョージャにくれた、鳥をつかまえるわなでした。わなは、わくに板がとりつけられていて、あみがたたみこまれているものです。板の上にたねをまいて、庭に出しておくのです。小鳥がとんできて、板の上ののると、板がひょいとあかって、あみがひとりでにパタンととじるのです。セリョージャはおよろこびで、おかあさんのところに走って行って、わなを見せました。おかあさんは言いました。

「よくないおもちゃね。小鳥をとってどうするの？ なんのためにかわいそうなことをするの？」

「かごにいれるんだよ。いい声でなくよ。ぼく、えさをやるよ。」

セリョージャはたねをもってきて、板の上にもき、わなを庭におきました。そして、小鳥がとんでくるのをずっと待っていました。けれども、鳥たちはセリョージャをこわかって、わなのほうには、とんできませんでした。セリョージャはお昼を食べにいき、わなはそのままにしておきました。お昼のあとに見てみると、あみがとじていて、あみの下で、小鳥がもがいています。セリョージャは、およろこびで小鳥をつかまえると、家にもっていきました。

「ママ！ 見て、小鳥をつかまえたよ。これ、きっと、ナイチンゲールだね！ しんぞうがビクンビクンいってるよ！」

おかあさんが言いました。

「それはマヒワ。ねえ、かわいそうなことしないで、にがしてやったほうがいいわよ。」

「だめだめ、えさをやって、水をやるんだから。」

セリョージャはマヒワをかごに入れ、二日のあいだ、えさをやり水をやって、かごをきれいにしてやりました。三日目にセリョージャはマヒワのことをわすれてしまい、水をかえてやりませんでした。おかあさんがセリョージャに言いました。

「ほら、見なさい。鳥さんのこと、わすれてしまったでしょ。はなしてやったほうがいいわよ。」

「だめだめ、わすれない。すぐに水をやって、かごをきれいにするから。」

セリョージャがかごに手をいれて、そうじをはじめると、マヒワはびっくりして、かごのなかであばれました。セリョージャは、かごをきれいにして、水をくみにいきました。セリョージャが、かごをしめわすれたことに気づいたおかあさ

んは大声で、

「セリョージャ、かごをしめないと、鳥さんがとびだして、ぶつかってしまうわよ!」

おかあさんがそう言いおわらないうちに、マヒワは出口を見つけて、おおよろこびで羽をひろげると、部屋をよこぎって、まどにむかってとんでいきました。が、ガラスが目にはいらず、ガラスにぶつかって、まどのしきいの上におちました。

セリョージャはかけよって、マヒワを手にとり、かごにもどしました。マヒワはまだ生きていました。けれども、羽をひろげたまま、うつぶせによこになり、息がくるしそうでした。セリョージャは、じっと見つめたまま、なきだしました。

「ママ! どうしたらいいの?」

「もうどうもできないのよ。」セリョージャは一日中かごのそばをはなれずに、ずっとマヒワを見ていましたが、マヒワはあいかわらずうつぶせのままよこたわり、ハアハアくるしそうに息をしていました。セリョージャがねるときにも、マヒワはまだ生きていました。セリョージャはなかなかねつくことができず、目をつぶるたびに、よこになって息をしているマヒワのすがたが目にかぶるのでした。朝、セリョージャがかごに近づいてみると、マヒワはもうあおむけになって、足をぎゅっとちぢめて、かたくなっていました。それからというもの、セリョージャはもう二度と鳥をつかまえませんでした。

* 名の日…自分と同じ名前の聖人の祝日

「生き物を飼っていて、死なせたり、逃げられたりする。そういう物語は、古くから現代まで、児童文学の世界ではよく出てくるね。」

「このお話、『アーズブカ』の中では一番長い部類だけど、展開は簡単で至って分かりやすい。つい、こんなに長く書かなくてもよかったのに…とってしまう。」

「長い分だけマヒワの描写が、とても写実的で細かい。理科の授業をやっているのか、と思うような視点を感じさせる。」

「マヒワがガラスにぶつかって息も絶え絶えになる。そのときは、うつぶせに横になっていたのが、翌朝には、あおむけになって、足を縮め、かたくなっていた、というのだから、とてもリアルだ。亡くなっているまでの描写は、リアルの極みだよ。」

「鳥の畏を仕掛けてから死んでしまうまで、わずか3日ぐらいの出来事なんだ。」

「その期間が短いだけに、セリョージャの衝撃も大きく、深かった。もう鳥を捕まえようとはしなかった、という気持ちはよく分かる。」

「生き物の死を間近に見て、悲しみを深くする。そんな体験を農民の子どもたちは何度もし

ているのだろうか。」

「セリョージャの母親は終始、ブレーキ役を果たしている。『小鳥をとってどうするの?』『にがしてやったほうがいいわよ』。餌を忘れたら、再び『はなしてやったほうがいいわよ』と勧める。この繰り返されているマイナスのメッセージが、トン、トン、トン……と、お話にリズム感というか勢いを与えているのかな。」

「魔女がいるから森に行ったらいけないよ、と忠告するように、これも昔話によくあるパターンだ。」

「マヒワはスズメの仲間です少し小さいという。第14話『かごの鳥』(8頁)にも登場するし、余り珍しい鳥ではなかったのでは? セリョージャが最初に勘違いしたナイチンゲールの方が人気のあった書き方になっている。」

「マヒワは小鳥の中でも特にかごの中が嫌いなのかな。大喜びで羽を広げて窓から飛び出ようとした。でも、かわいそうにガラスに気付かないでぶつかっちゃった。」

「それも母親がお見通しだった。かごを閉め忘れたのに気付くと、『鳥さんがとびだして、ぶつかってしまうわよ』と、とっさに警告したのに、間に合わなかった。」

「寝ぼけていて学寮研修中に窓ガラスにぶつかった学生がいてびっくりした。」

「そう、そう。中学校のときの、東京への修学旅行で、やっぱりガラス窓に気付かなかった同級生がいたよ。大きな音がして、みんな目を覚ましちゃった。」

「鳥を捕まえる罫は、名の日のプレゼントだったというが、ロシアでは、誕生日以上にうれしくて、盛大な祝日だ。『戦争と平和』にもナターシャの名の日のお祝いが描かれているね。」